

【お年玉企画 第二弾】

午年だからと自分のことを猛アピールする呼延灼は、
姫始めでハメ潰されて赤ちゃんを孕んでしまう

1月1日——

「マスターっ！！ 新年明けましておめでとうございますっ」

「明けましておめでとう。ところでその格好は？」

新年を迎えた直後に”藤丸 立香”の元へと突撃するような速度で現れた”呼延灼”は、身体の芯から冷え込んでいくような真冬の寒い一日であるのにも関わらず、去年の真夏に着ていたスリリングショット風の非常にセクシーな黒色の水着を身に纏っていた。ドスケベな水着によって肉感タップリである彼女のムチムチボディが更に強調されているのだが、メートル超えのデカパイから生み出される深い谷間や眩しい位に真っ白でムッチリとした太ももなどに男性の視線は無意識に吸い寄せられてしまう。

色んな場所が食い込んでしまっている破廉恥な格好についてマスターから質問された呼延灼は待ってましたとばかりに、頭部で可愛らしく揺れている兎耳ならぬ口バ耳のカチューシャ風リボンを指差しながら自信満々に答えたのである。

「ふふふっ、良くぞ聞いてくれました。今年はなんと午年(うまどし)なんですっ！ つまり”エンプーサ”である私が主役の年と言っても過言ではありませんっ！！」

「あれ？ エンプーサって口バだったよね。それに午年なら赤兎馬さんの方が適任なんじゃ——」

「と・に・か・くっ！ 今年は存分に私のことを甘やかして褒めまくって下さいっ！！」

呼延灼よりも遥かに馬である赤兎馬の存在をマスターに指摘されたのだが、馬の耳に念仏とばかりに彼女はそんな正論を無視して自分の欲望を発露させるのであった。そもそも午年だから自分が主役であるという主張はあくまでも建前であり、本当は胸の内から湧き上がる彼に甘やかされたりいっぱい褒めて欲しいというものである。

「もっとナデナデして欲しいです。可愛くて役に立つサーヴァントだっていっぱい褒めて下さい」

依存していると表現しても良い位にマスターのことが大好きである呼延灼は、鍛え上げられた彼の厚い胸板に自身の豊満なおっぱいが『むにゅうっ♡♡』と潰れてしまう位に押し付けるのであった。期待していることを隠し切れない上目遣いをしながら頬を朱に染める彼女は、緊張によってぷるぷると震えている柔らかそうな唇を動かして”真の目的”を口にする。

「それにっ♡♡♡ ひっ、”姫始め”で私のことを愛して欲しいです……っ♡♡」

「姫始めの意味はちゃんと分かってる？」

「〜〜〜っ♡♡♡ はっ、はい……っ♡♡ ちゃんと調べてきました♡♡♡♡ 男性と女性が年の始まりに愛し合うことですよっ♡♡♡」

年明けから最初に男女が性行為することが”姫始め”と呼ばれるものであり、呼延灼はそのことを目的にしてマスターの元へと訪れていたのだ。自分からセックスするために男性の元に来たという意味に他ならず、格好だけで無く中身までドスケベな彼女に彼もムラッと欲情してしまう。

理性がグラグラと揺らいでしまっているマスターに対して、呼延灼は止めを刺すように肢体をピッタリと密着させながら耳元で誘惑の言葉を口にする。

「灼のおっぱいもお尻も揉み放題です……っ♡♡♡ それにお馬さんみたいに四つん這いになりますからっ♡♡ 姫始めのラブラブ”種付け”エッチして下さい♡♡♡♡」

——ガシッ

「あ——っ♡♡♡」

「ここまで誘惑したんだから絶対に逃さないよ」

「はっ、はい〜〜っ♡♡」

ドスケベ過ぎる呼延灼の誘惑の言葉に理性の糸がブチッと切れてしまったマスターは、女性特有のキュッと括れている腰を片腕で抱くように拘束して逃げられなくするのであった。調子に乗って煽り過ぎてしまったのだと今更ながら気付いた彼女であったが、既に物理的に拘束されてしまっているため逃げ出すことは不可能である。

そのまま二人はマスターの部屋まで移動することとなり、新年早々から姫始めをするために消えていったのだ。

——ドッチュンっ!!!♡♡♡♡ ズッチュンッ!♡♡ バッチュンっ!!!♡♡♡

「お” お” ッ♡♡♡ ピストンはげしっ♡♡ 激し過ぎます” う” ～～っッ” ♡♡♡♡ ん”
ほお” ～～～～っッ♡♡♡」

「勝手に腰逃すなっ! お馬さんの真似するならもっと腰突き出せ——っ」

——ドッチ” ユン” っッッ” !!!!!♡♡♡♡♡♡

「ん” ひい” いい” い” い” い” いいい” い” ～～～～～っッッ” ??!!!♡♡♡♡♡♡」

丸々と瑞々しい桃のようなデカ尻と共に子宮を叩き潰され、呼延灼は馬の嘶きのような絶叫を上げてしまうのであった。

部屋の扉が閉まった直後から完全に”雄”となったマスターによって呼延灼はデカパイを揉み潰されてしまい、そのままベッドの縁に両手を突かされてお尻を突き出す体勢になった瞬間に怒張した魔羅を根元まで一気に突き入れられたのである。自分からエロ衣装を着用してハメて貰いに来るようなドスケベ女に容赦や手加減などする必要はある筈も無く、初手から全力の立ちバックによって腰を叩き付けられて彼女は尻肉と子宮をイジメられていた。

——バッチュンっ!!!♡♡♡ ダッパンっ!!!♡♡ ズッチュンッ!!!♡♡♡♡

「お” っ♡♡ おちんぽ太くて長すぎますう” ～～っッ” ♡♡♡ しっ、しぎゅう押し潰れて
イっち” やい” ます” う” ——っッッ” ♡♡♡♡」

「勝手にアクメするな——っ! 射精するまで我慢しろっ」

「そっ、そんなの絶対むりですよ” ～～っッッ” ♡♡♡ お” っき” ゆう” う” う” ううう” う”
” うう” う” ～～～～っッッ??!!!♡♡♡♡♡♡」

脳みそに電流を流されているような強烈な快感によって呼延灼は絶頂を迎えてしまう寸前であったが、マスターは柔らかな尻肉がブルンブルンと波打つ程に腰を叩き付けながら射精するま

で絶頂を我慢させようとする。搗き立てのお餅のようであった尻タブは何度も腰を叩き付けられたことにより、痛々しいと感じる位に真っ赤に腫れ上がって平手で何度も spanking をされたような状態となっていた。

「いっつもデカパイ揺らし過ぎだろっ！ 宝具前に水着でクラウチングポーズしてる時、俺が後ろにいるからってデカケツ振って誘ってるだろ反省しろっ！！」

「お`っ、おっぱい大きくてごめんなさい——っ♡♡♡♡ まっ、ますたぁに見られてると思ってお尻ふりふり揺らしてましたぁ♡♡ エッチで可愛いオナネタサーバントになりたかったんですぅ`♡♡♡♡」

——バッチ` ユンっっ` !!!♡♡♡♡♡

「お`ぎゅ——っ??!!!♡♡♡♡」

「何がオナネタだっ！ 呼延灼はオナホサーバントがお似合いだろっ！！」

呼延灼は健気にも全身をプルプルと緊張させることによって絶頂するのを我慢しようとしていたのだが、ポルチオ性感帯である膣孔の奥をドチュドチュ突き回されながら愛しているマスターに強引に犯されているというシチュエーションに興奮してしまっている。快感の波が押し寄せる頻度と高さが上がっていくのと比例して、彼がピストンによって腰を打ち付ける速度と力強さは増していくのであった。

そして、限界まで液体を注がれた器から溢れてしまうように、絶頂の悦楽を耐え続けた呼延灼も無様な絶頂を迎える。

「もっ、もうむりですぅ` ~っ♡♡♡♡ あっ、アクメすり` ゆ……っ♡♡ 我慢むりれしゅ` ツ♡♡♡」

「先にイクならオナホだって認めるっ！！」

「み……っ、認めましゅ♡♡♡ 灼はますたぁ専用のオナホでしゅっ♡♡ お`ぎ`ゅ——っ♡♡♡♡ イ`ク`い`ぎ`ゆイ`ギ`ユ——っ♡♡♡ イ`ック`う`ウ`う`ウ`う`ウ`う`う`う` ~~~~~っっっっ♡♡♡♡♡♡♡♡」

——ぷっしゅううううう~~~~っっ♡♡♡♡ プシュ——っ♡♡ ぷっしゅうううううううううう~~~~っっ♡♡♡♡♡♡

脳みそが焼き焦げてしまいそんな快楽責めされる呼延灼は自分がマスター専用のオナホサーバントであることを認め、次の瞬間には部屋の外にまで響き渡るような声量である濁音に彩ら

れた絶叫上げるのであった。目の前が真っ白な閃光に埋め尽くされながら瞳の奥ではバチバチと火花が散ることとなり、ビクンビクンと全身が痙攣するように震えるのに合わせて大量の潮を噴き出してしまふ。

我慢していた分だけ落差が激しくなるように意識が飛んでしまいそうな深過ぎるアクメを迎えている呼延灼であったが、マスターはまだ射精しておらず絶頂でビクビクと痙攣している膣孔の快楽により興奮は更に高まっている。

——バチュンっ！！♡♡♡♡

「ん` お` ——っ？！！♡♡♡ なっ、なんれえ` ……っ？♡♡」
「オナホサーヴァントになったんだから、呼延灼がイっても関係ないでしょ……っ。もっとオマンコ頑張っって締めろッ」

——ドッチ` ユン` っ` ！！！！♡♡♡♡♡♡

「お` っき` ゆう` う` う` ううう` う` うう` う` ~~~~~っっ` ♡♡♡♡♡♡」

深過ぎる絶頂を迎えている最中であるのにも関わらず、呼延灼のオマンコは再び突かれて押し潰されてしまうのであった。大きく開いた口から舌を突き出しながら獣のように野太い絶叫を上げてしまうのだが、それを聞いたことで更に興奮が高まるマスターのピストンはもっと激しく力強いものとなる。

——ズッチュンっ！！♡♡♡ パチュンッ！♡♡ バッチュンっ` ！！！！♡♡♡♡

「お` っほお` おお` お` お` お` ~~~~~っっ` ♡♡♡♡ もっ、もうイ` って` るのにい` ~~~~~♡♡ アク` メず` り` ゆッ♡♡♡ もっとすごいキちゃい` ます` う` ~~~~~♡♡♡♡」

「呼延灼は本当に身体はムチムチでドスケベなのにつ。オマンコは弱々のクソ雑魚だね……っ」
「~~~~~っっ` ♡♡♡♡ おっ、オチンポ気持ち良過ぎるだけですう` ……っ♡♡♡」
「オナホの癖に口答えするなっ！！」

——ズッチュンっ！！！！♡♡♡♡

「ん`ぎゅう`ううう`う`う~~~~っツ?!♡♡♡♡ ごっ、ごめんによさい`っ♡♡
しゃくはクソ雑魚おまんこですう`~~~~っ♡♡♡」

腰を叩き付けられただけで絶頂を更に深いものと上書きされてしまい、言葉で反抗することさえ出来ずに呼延灼は自分がクソ雑魚オマンコであると認めてしまう。膣孔全体を徹底的に穿られながら子宮を叩き潰される度にマゾメスオナホとして調教されていき、気付けば両腕の力を維持出来なくなって上半身がベッドに突っ伏して、ムッチリとした桃尻だけを突き出すようなドスケベな体勢となっていた。

膣孔の中で粘っこい愛液が長大な魔羅によって掻き混ぜられ、ブクブクと泡立って真っ白になった頃にはマスターも吐精が迫る。巨大でずっしりと重たい睾丸の内部でグツグツと特濃ザーメンが煮詰まっており、快感が限界まで高まっているため精液が暴れ回るように解放を求めているのであった。

「射精すぞっ!! 呼延灼のオマンコの奥に注ぎ込む——っツ」
「——っツ`♡♡♡♡♡♡ しゃくのおまんこにいっぱいだしてえっ♡♡ すっ、すごい
のキチャいますう`うう`う`う`う`う~~~~っ♡♡♡♡ お`っほお`おお`お`お`
`お`お`——っツ♡♡♡♡♡」

——パッチュンっ!!!♡♡♡♡ バチュンッ!!!♡♡ ドッチュンっ!!!!♡♡♡

「子宮の入り口開けっ!!!」
「お`——っ♡♡♡♡ お`ひっ♡♡ しきゅうイ`ぎ`ゆ……っ♡♡♡」

限界まで射精を耐えるマスターはピストンにもラストスパートを掛け、呼延灼の桃尻に腰を叩き付ける破裂音が部屋全体に木霊する。そして、彼は限界まで引き絞った弓を放つように後ろに引いていた腰を全力で叩き付け、子宮口を抉じ開けるように魔羅の先端部分が一部突き刺さっている状態で吐精が始まった。

——バッチ`ュンっツ`!!!!♡♡♡♡♡♡

「受け止める——っ!」
「お`っほお`おお`お`お`お`~~~~っツ`♡♡♡♡」

——ぐり` ゆう` ～～っ♡♡♡♡ ぐりぐりい……っ♡♡♡

「ねえっ、呼延灼は気持ち良かった？」

「お` ——っ` ?!♡♡♡ グリグリしにやいれえ` ♡♡ きっ、きもち` いい` れし`
` ゆっ♡♡♡ 気持ち良いれし` ゆからあ` ～～っ♡♡♡ お` っひい` い` いい` い`
` ~~~~~っ` ♡♡♡」

「それじゃあ……もっと気持ち良くなるうね。呼延灼のオマンコにザーメンタツプリ塗り込みながら、タプタプになってる子宮いっぱい捏ね潰して何回も射精するよ……っ」

「~~~~っ♡♡♡ そ……っ、そんなのむりれし` ゆっ♡♡ あ` ひ……っ、ひい`
` ~~~~~っ` ♡♡♡」

頭をブンブンと左右に振り乱すことによって無理ですと言葉と一緒に伝えようとする呼延灼であったが、絶対に逃がせるつもりが無いマスターは彼女の括れている細腰を左右からガシッと驚掴みにしている。彼も上体を倒すことによって更に逃げ場を奪うように覆い被さりながら、耳元で囁き掛けるようにこれからハメ潰すことを宣言した。

「一回だけじゃ姫始めは終わらせないから。呼延灼のことマゾメスオナホにして上げるっ！」

「ひっ、ひい……っ♡♡♡ たっ、たしゆけへえ` ♡♡ お` ——っ` ?!♡♡♡」

射精回数三回目——

——ドッチュンっ!!♡♡♡ チュップンっ!!!♡♡ バッチ` ユンっ!!♡♡♡

「おにゃかくるひい……っ♡♡♡ もうずっとイっへましゅう～～っ♡♡ お
っぎゅううううううう～～～っ♡♡♡」

「妊婦みたいなボテ腹エ口過ぎるだろっ。絶対に孕ませるっ！ 赤ちゃん産むって言えっ！！」
「お～～～っ♡♡♡ ?!!♡♡♡ うっ、うみましゅ……っ♡♡ ますたあの赤ちゃんう
みましゅからあ♡♡♡ んっひゅうううううううううう
～～～っ♡♡♡♡♡♡」

射精回数十二回目——

——むぎゅう～～っ♡♡♡ むにゅっ♡♡ むぎゅぎゅう～～～っ♡♡♡♡♡♡

「呼延灼のデカパイ柔らかくて揉み心地最高っ！！ おっぱいハンドルにしながらピストンする
とオマンコ締まって気持ち良い……っ」

「だっ、だめえ……っ♡♡♡♡ おっぱいバカになっちゃいまずう～～っ♡♡
♡♡♡ まりゃイグ♡♡♡ おまんこイぎゅ……っ♡♡♡♡ あああああああ
ああああああああああああ——っ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

射精回数三十六回目——

——ぬっぷ♡♡♡♡ じゅっぷ……っ♡♡ にゅっぷう～～っ♡♡ ぢゅっぷうっ
♡♡♡

「おひっ♡♡♡♡ おっほおおお——っ♡♡ おっ、おにゃかこわれり
ゅう～～っ♡♡♡ ぶっといおちんぽでズポズポすごいのおおおおお
お——っ♡♡♡」

「ふわふわトロトロで呼延灼のアナルエ口過ぎ……っ。もっと奥までホジってお尻の穴もオナホ
にして上げる」

「んひい～～～っ♡♡♡♡ おっ♡♡ おしりでイっちゃう……っ
♡♡♡ おしりもおにゃほになりゅっ♡♡ おっほおおおおおおお
おおおお～～～っ♡♡♡♡♡♡」

射精回数六十四回目——

——ずぶにゆるるう～～っ♡♡♡♡ タッパンっ！♡♡ にゅぶるる
るう～～～っ♡♡♡♡ ダッパンっ！♡♡♡

本日もマスターに愛されていることで自己肯定感がMAXのハイテンション状態となっている呼延灼は、ロバ耳を表すように両手を頭の上で立てながら爆乳をブルブルンと揺らして騎乗位セックスご奉仕をするのであった。

——バッチュンっ！！♡♡♡ ズッチュンっ！♡♡ めっちゅんっ！！♡♡♡♡ パッチュンっ！！♡♡♡

「いっ、いえ～いっ！♡♡♡ 今日も大好きなマスターのオチンポの上でえ♡♡ んうっ♡♡♡ いっぱい騎乗位しますう♡♡♡♡ ぴょんぴょんっ！！♡♡」

「呼延灼はエッチが大好きになったね」

「はいっ♡♡ お` ほっ♡♡♡♡ もうマスターとエッチしないとぉ♡♡♡ あっ♡♡ 満足出来なくなっちゃいましたあ……っ♡♡♡♡」

トトロ口なドスケベおまんこ全体をキュンキュンと愛情タップリに締め付けながら妖艶なダンスを踊るかのようにムチムチとした桃尻を上下させ、呼延灼は大好きなマスターと深く繋がりながら愛し合う悦楽に溺れ切っている。高まり過ぎている幸福感と快感によって彼女の表情は蕩け切っているのだが、悪戯心が湧き上がってしまう彼は腰をガシッと鷲掴みにしてそのまま思いっ切り真下から突き上げるのであった。

——ドッチ` ユンっッ` !!!!!♡♡♡♡♡♡

「ん` っき` ゆう` う` う` ううう` う` うう` う` ~~~~~っっッ` ???!!!!♡♡♡♡♡♡」

「それならちゃんと一番奥までチンポが挿入するように騎乗位しようね」

「お` っ♡♡♡ お` ひ——っッ` ♡♡ はっ、はひい……っ♡♡♡♡ もっりよおしりパンパンうちつけますっ♡♡♡」

こうして簡単にマゾメスイッチがオンとなってしまった呼延灼は、今日もマスターのために文字通り全身を用いて誠心誠意のご奉仕を行う。最終的にはいつものようにハメ潰されて幸せアクメで失神することとなり、彼女は毎年のように赤ちゃんを産んでは直ぐに子作りに励むラブラブ夫婦となったのである。

「——灼はマスターのことが大・大・大好きですっ♡♡♡ これからもいっぱい孕ませて下さいねっ♡♡」